

2023 年度「カンボジア 短期派遣プログラム報告書」

国際食料情報学部・国際農業開発学科・3 年・41621091・二ツ森惣成

1. 当初の目的

私はまず外国の文化に触れることで異文化理解をできる人になりたいと思っていた。私は将来、外国特に貧困地域の農業を支え、飢餓問題解決に貢献したいと考えている。そのためにはもちろん農業の知識を得ることも必要ではあるがそれ以前に多くの国の文化・慣習を理解していなければ現地の方たちとの意思疎通が難しくなり、先進国側の一方的な単なる「開発」になりかねないと考えている。現地ではどのような文化が根付いており、それらの文化が現地の人々にどのような影響を与えているのかということについて固定観念なく学ぼうとしていた。そして、人との交流を通して誰に対しても偏見を持つことなく積極的にコミュニケーションをとることができるようになりたいとも思っていた。リーダーという責任も与えられていたので、学生、先生方、支えてくださるすべての方々といかに協力できるかということも私の中の一つのテーマであった。また、カンボジアの過去の歴史から生じている課題点の理解とそれらの課題解決のためにできることを発見し、カンボジアのためにできることを少しでも発見していきたいと思っていた。

2. 目的達成のために現地で活動した内容

それらの目的をもってカンボジアで様々な経験をさせて頂いた。目的達成のために私はいくつか取り組んだことがある。私はカンボジアに行く前にカンボジアの文化などを日本の学生と共に学んでいた。しかし、現地で五感を通して学ぶ文化は私にさらなる理解を与えてくれた。プノンペン国立博物館では 5000 点以上の彫刻、木彫り、陶磁器などがあった。私は積極的にガイドさんの話や先生の説明を聞きながら、年代ごとに移り変わっていく芸術や仏像の様式がヒンディー教から仏教に変化していったカンボジアの大きな特徴を表していることに気づいた。プノンペン王宮に行った時にもガイドさんから「ラーマヤナ」の壁画回廊やシルバー・パゴダの説明を聞く中で質問をしながら、仏教に対する理解を深めた。日本では無宗教の人が多い故に、宗教に触れる機会はとても貴重だった。私は改めて宗教の大切さを感じ、宗教を通して人としての成長が成されていくことを実感した。

次にどんな人ともコミュニケーションできるようになるために取り組んだことを述べる。まず、カンボジアの学生に対して取り組んだことである。私はそれほど英語がうまく話せない。よって自分の意思をうまく伝えられないことがあった。しかし、笑顔で相手の目を見ながらボディーランゲージなども使うことで意思を伝えることができた。そして、カンボジアの文化に興味を持ちながらカンボジアに関する質問を積極的にしていた。特にクメール語は多く学んだ。カンボジアの文化を学びながら学生のことも段々と理解することができた。カンボジアの学生はいつも明るい印象が強かった。冗談も好んでいる感じだったので「オーバーリアクション」は意識していた。カンボジアの学生の心を開くにはまずこちら側が心を開き、喜ばせることが必要だと感

じた。日本の学生に対してはリーダーということもあり全員のことを常に気にかけていた。よく話しながら何か抱えている人がいたときは傾聴を意識し、全て受け止めていた。なんでも言い合える関係性を日本の学生同士で築けていたことが皆楽しく過ごせていた要因だったと考えている。先生方、支えてくださった方、現地の方に対してはいつも感謝の気持ちを忘れず、協力する意識を持っていた。目の前の一人のために自分ができることはないだろうかと考えていた。楽しく会話することもその一つであると思う。小さなことでも人のために行動した時にコミュニケーションの幅も深さも広がっていくと実感した。

最後に、カンボジアの実態の理解と私がカンボジアのためにできることを発見するために取り組んだことを述べる。私はカンボジアに実際に行き、様々な方から話を聞くことで多くの実態を理解した。まず、カンボジアは中国と日本の支援が特に大きな役割を果たしていることを理解した。中国は住居(高層ビル)の建設に大きな役割を果たしていた。そして、プノンペンには中国が作った高層ビルが多くあったがカンボジアの人々は感謝しつつも複雑な心情を持っていることを理解した。カンボジアの人々の中には日本人と同じように共産主義への危機感を抱いている人もいた。中国に対するカンボジアの方の捉え方は様々であった。一方、日本はインフラの整備に大きな役割を果たしていた。特にカンボジアの方は橋を作ってくれたことに感謝していた。大きなメコン川に架ける橋は丈夫でなければならぬので日本の技術が活かされた。カンボジアの方は日本のことがとても好きだそう。無償で支援もするほどカンボジアのために協力しているからだ。「日本好き」なカンボジアの方々の特徴は随所で見られた。私たちはカンボジアの方々から多くの愛を受けたので純粋に嬉しかった。日本とカンボジアの絆を感じた。

また、カンボジアにおいて格差があることを痛感した。今回はプノンペンとコンポンチャムに行かせて頂いたが使っている住居や家具には大きな違いがあった。貧富の差はやはり激しく、コンポンチャムに行った際には何度か女の子やおばあさんから「お金をください」と言われた。女の子の悲しそうな瞳は忘れることはできない。私の服を掴みながら何度も繰り返していた「1 ドララー」という言葉はカンボジアの実態を表していた。私はそのような人々を見て心苦しかった。そして、その背景には知識不足が関係していると感じた。英語もカンボジア国内での公用語になっているがコンポンチャムでは英語が話せる人が少なかった。そして、農業や環境に関する知識の不足さもコンポンチャムで感じた。私たち学生は教育を受けているからこそその知識があり、活用できているということも考えられるが農村の方から学ぶことも多くあった。

私はこのような経験を通してカンボジアのためにできることを考えた。将来的には直接的に支援できると考えたが今できることとしてはカンボジアの良さを多くの人に伝えることであると考えた。まず私はカンボジアの方達は日本を愛してくださっていることを第一に伝えたい。その次に宗教(仏教)によってより充実した幸せな生活を送っていることを伝えたい。その他にも食事が素晴らしいことなどを伝えていきたい。

3. 目標達成度の自己評価

私は目標を果たしたと感じている。なぜなら、短期留学に行く前よりもカンボジアに対して興味を持つことができ、カンボジアが大好きになったからだ。私はカンボジアのことを正直全く理解していなかったが、様々な人との交流を通して「カンボジア」を理解できた。私は外国の方と交流することに対して自信は無かった。しかし、自分から積極的に交流することを心がけていくことができた。私自身が知的好奇心旺盛であったことを知った。やはり成長のためには失敗したとしても挫けずに挑戦を続けることが必要不可欠だと感じた。

4. 今後の取り組み

今後はカンボジアの学生と連絡を取り合いながら関係性を維持していく。今回会うことができた一人一人はかけがえのない友達になった。本当に感謝している。だからこそ、この関係性を維持し続け、カンボジアと日本の架け橋に少しでもなれたらと思っている。今度はカンボジアの学生に日本に来てもらいながら交流できたら嬉しい。そして、今後もカンボジアに関心を持って生活していきたいと思っている。カンボジアの文化を多角的に捉えていきながらカンボジアのより深い魅力を探していきたいと思う。また、英語をより流暢に話せられるように努力していきたいと思う。正直、言語の壁を強く感じた。私の責任で伝えたかったことが通じなかったことが多かったので悔しさも残った。これから発展途上国において貢献するためには英語を話せることが最低条件だと感じているので英語に多く触れていくことを目指す。

5. その他

(ア)持っていて良かったもの

変換器、個人的に用意した日本のお土産、お出かけ用ショルダーバック、カードゲーム類（トランプ類）

(イ)用意したがいらなかったもの

上着

(ウ)現地で使用したお小遣いの金額

3万円

6. 次年度以降の参加者へ

(ア)事前に準備した方がよいこと

日本札をドル札に両替しておくこと、帽子・サングラスなどの強い日差しから身を守るもの

(イ)勉強しておくべきこと

英語、基本的なカンボジアの歴史・文化、あいさつ程度のクメール語

